



建設現場での安全作業 「KY活動」



株式会社三友土質エンジニアリング 本社事業部 人見 彰則

1. はじめに

労働災害が発生する原因が「不安全な状態」と「不安全な行動」に分類されることはよく知られています。厚生労働省の労働災害原因要素の分析（平成26年）によると、建設業における休業4日以上労働災害のうち、「不安全な状態」がないものは全体の約1.3%、「不安全な行動」がないものは全体の約3.1%、「不安全な状態」と「不安全な行動」のどちらもないものは全体の約0.8%となります。（図-1）建設業における労働災害のほとんどは「不安全な状態」と「不安全な行動」の両方が重なって発生しており、平成5年の分析開始以来、同様の結果が続いています。これらの危険要因に対して、事前に予知し、労働災害の発生を防止する取り組みがKY活動（危険予知活動）です。

不安全な状態 + 不安全な行動 96.4%	不安全な状態のみ 2.3%
不安全な行動のみ 0.5%	両方無し 0.8%

図-1 労働災害原因要素の分析（平成26年 建設業）より作成

2. KY活動とリスクアセスメント

KY活動と前号のテーマであったリスクアセスメントはどちらも労働災害の防止を目的としていますが、実施主体や手法に違いがあります。

KY活動は現場の安全を確保するために行われ、作業者達の日々の取り組みが基本となるため、対策は当面の行動レベルとなるのが一般的です。これに対してリスクアセスメントは組織的に行われる計画的な安全対策といえます。

また、リスクアセスメントは「危険性や有害性の特定」、「リスクの見積り」、「優先度の設定」、「リスク低減措置」といった一連の手順で実施されますが、出発点である「危険性や有害性の特定」には現場のKY活動により養成される危険に対する感受性が欠かせません。

リスクアセスメントで出来るのは、あくまでもリスクを許容可能なレベルまで低減することであり、依然としてそこにリスクは存在し続けているため、許容可能と判断されたリスクであっても、不安全行動によって重大な事故や災害につながる可能性は常に伴います。

だからこそ、作業にリスクや危険が伴う地盤調査・地盤補強工事での安全衛生においてKY活動が果たす役割は大きいといえます。

3. KY活動のバリエーション

KY活動は様々な形式で実施されています。一人ひとりの危険感受性を鋭くし、集中力を高め、問題解決能力を向上させ、実践への意欲を高めることをねらいとしたKYT（危険予知トレーニング）としてはイラストシート等を用い、5～6人で行う「KYT基礎4ラウンド法」が基本的な形とされています（表-1）。

表-1 KYT 基礎4ラウンド法の進め方

ラウンド	危険予知訓練の4ラウンド	危険予知訓練の進め方
1 R	（現状把握） どんな危険が ひそんでいるか	作業現場にひそむ危険を発見し、危険要因とその要因が引き起こす危険な現象を出し合い、共有する →「～なので～して～になる」
2 R	（本質追及） これが危険の ポイントだ	発見した危険のうち、重要だと思われる危険を抽出し、みんなの合意でしぼり込み『危険のポイント』として、指差し唱和で確認する →「危険のポイント ～なので～して～になる ヨシ！」
3 R	（対策樹立） あなたなら どうする	危険のポイントを解決するにはどうしたらよいかを考え、具体的な対策案を出し合う
4 R	（目標設定） 私達はこうする	対策の中からみんなの合意でしぼり込み、『重点実施項目』とし、それを実践するための『チーム行動目標』を設定し指差し唱和で確認する。 →「～する時は～を～して～しよう ヨシ！」

現場では時間的な制約もあるため、実践として「第1 R（現状把握）どんな危険がありますか」、「第2 R（目標設定）私たちはこうする」、の2ラウンド方式（2RKY）の形になることも多いでしょう。（図-2）

現場KYの様に短時間で行うKY活動では対象とする危険の選定が大切になるため、職長やリーダーの役割がより重要となります。

その他、現場状況だけでなく作業者の健康状態に着目する健康KY、1人で作業する場合に行う1人KY等もあります。1人KY実施時には自問自答カードを用意する等の工夫で効果を高めることが出来ます。



図-2 KY 活動記録表

10